
ポケモン不思議のダンジョン 意志を遂げる者

慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 意志を遂げる者

【Nコード】

N0274Y

【作者名】

慎

【あらすじ】

目覚めたら森だった。どういうことだ、とピカチュウは自分に問いかける。誰も答えてくれなかった。不意に気づく。すぐそばに誰かいた。臆病者のそいつとひょんなことから探検隊を組むことになり——そして冒険は始まるのだ（仮あらすじ）

ポケダンベースですが、かなり邪道な話になります。気を付けてください。

0 Prologue

季節は終わりに差し掛かった秋。

場所は、世界の極東に位置する、天をつくかのような山が争うように連なる大山脈。そのふもとの鬱蒼とした森。そこに二人はいた。

幾層に積もった落ち葉の上に身体を横たえて、ブラッキーはぶかぶかと宙に浮かんだ一人の幼いジュペッタが、木の枝に吊るされた麻袋を叩いたり、蹴ったりするさまを見ていた。その顔はお世辞にも機嫌がいいとは言えない。

ジュペッタが遊びはじめてからそう時間もたたない内に、眉間にしわを寄せたブラッキーが「やめろよ」と低い声で言った。それにジュペッタが不思議そうな顔で振り返る。

「どうして」

「どうしてって、お前」ブラッキーは呆れた面持ちだ。「よくこんな時に遊んでられるな。全く呆れるよ。子は親に似るっていうが、弟子も師匠に似るんじゃないかねえの。本当、お前はお前の師匠に似ている。見ていて気持ち悪くなるところとか、本当にな」

「ありがとう」ジュペッタがにっこりと笑った。

「褒めてないから。腹立つところもそっくりだ」

眉間にさらにしわを寄せて、それから腰を上げたブラッキーはジュペッタを呼び寄せた。「ちよいこっち来い」

素直にジュペッタはブラッキーのそばへいく。

「真面目な話をしようぜ」ブラッキーはずいどジュペッタに顔を寄せた。「今、あんな用済みで遊んでる暇はないんだよ。なあ、わかってるだろう。俺たちの仕事はまだ終わってないんだよ。なあ。な

あ。なあ。わかるだろう？ この救い用のない、くそつたれのクソガキ」

ジュペッタがにつこりと笑った。「よくわからないよ」
「死ね」

苛立った声でブラッキーが最悪の言葉をもって、ジュペッタを罵倒した。しかしジュペッタ自身はふわふわと何処か現実味のない声で可笑しそうに笑うだけで、その子供特有のキーの高い笑い声は余計にブラッキーを苛立たせた。

これだから子供は、と彼は小さな舌打ちを溢し、全く脈絡なくジュペッタに襲いかかった。

地面に積もった落ち葉が、ひやりとした秋の空気の中に舞い上がった。

視界がひっくりかえって、揺れる木立を背負ったブラッキーに前足で首元を押さえつけられても、ジュペッタは相変わらず可笑しそうに笑うばかりだった。

しまいには「どおしたの？」とあの高い、ブラッキーにとっては耳障り極まりない声でブラッキーに問いかける始末だ。薄気味悪い、とブラッキーは表情には出さずに思った。

「どうしたこうしたもねえよ。仕事再開させるぞ」声には怒気が混じっていた。

ジュペッタが小首を傾げた。「まだだめだよ」

「だめだあ？ …… ふざけんじゃねつつうの」ブラッキーはまた舌打ちをした。「ふざけんじゃねえよ」

前足に力を込めた分だけジュペッタの身体は腐葉土にずぶずぶと沈み込んだ。しかしそれでも子供は「あはは」と笑うばかりで、ブラッキーの苛立ちを着実に限界量に導いていった。

「何笑ってんだ。おい。おい。おい。このクソガキ、攻撃されてるんだぞ。気は確かか？」ブラッキーは口をへの字に曲げた。「いや、確かなわけ無いよな。師弟そろって気の触れた、くそつたれどもめ」

唐突にジュペッタの口元が弧の形に曲がった。

ブラッキーの雑言などは聞いてすらいなかった。ジュペッタは違うものを見ていた。違うものを見て、笑っていた。

しかしそれを見てついにブラッキーの堪忍袋の緒が切れた。小馬鹿にされたと思っただのだ。

「仕事！」怒りのままに叫ぶ。「やる気あんのかよ！！」

——瞬間、ブラッキーの身体が吹き飛ぶ。

先程とは比較になら無いほどの落ち葉が、横に水平に吹き飛び、木の幹に叩きつけられた彼のあとを追った。

突如生まれた暴風がそこら一帯を蹂躪しはじめる。木々は暴風を生み出した荒々しい青い身体の暴君を前にまるでお辞儀をするかのようには身体を曲げ、ただでさえ少ない葉を手放しざるをえなくなった。軋んだ枝があげる悲鳴が辺りにこだまする。

半ば地面に埋まっていたジュペッタもただでは済まされなかった。ふ、と身体が浮かんだったと思っただけ景色が横に流れてる。けれどジュペッタは哀れなブラッキーのように、叩きつけられることはなかった。

暴君が空中でジュペッタを捕まえたのだ。

「やる気」首の後ろに鈍い痛みを感じながら首をかしげて、ジュペッタは呟く。「もちろん、あるよ。師匠のやくにたちたいもの」

ジュペッタの首根っこをくわえて木の葉のように吹き飛ぶのを防いだ馬鹿みたいに大柄なポケモンはそのまま葉のなくなった剥き出しの地面に降り立つ。不運なことに着地地点にいた細木はバキバキと聞くに絶えない音をたてて折れた。

一方吹き飛ばされたブラッキーはというと。

「くそつたれめ」彼は呻いた。「このくそ野郎が」

そう罵倒しながらよろよと、木に叩きつけられたときに痛めた肩を気にしながら彼は立ち上がった。

ブラッキーは怒っていた。が、しかし彼は先程ジュペッタにしたように襲いかかりはしなかった。

流石の彼も、自分の何倍もの大きさの身体をした、その青いポケモン——ボーマンダに喧嘩を売るほど馬鹿ではなかったのだ。精々睨みあげることしかできない。

ブラッキーの睨みをボーマンダは気にすらしていなかった。彼は首を軽く動かして、くわえていたジュペッタを上に向かって放り投げた。落下地点はボーマンダの首の付け根だ。

そこに座り、首に頬を擦り寄せながら、ジュペッタはボーマンダに訊いた。

「狩りは、楽しかった？」

どろっとした赤いものが隙間に挟まってる歯をかちかちと鳴らして、ボーマンダはぐると唸った。ジュペッタが機嫌良さそうに「ならよかった」と笑った。

そのやり取りにブラッキーは顔をしかめる。

いくつかの悪言を小声で呟いてたから、彼はジュペッタを見上げた。見上げることに強い苛立ちを覚えた。

「もう“いい”のかよ？」

「うん」

「じゃあとつとに行け！ 捕まえてこい！！」

瞬間、再度広がったボーマンダの両翼がブラッキーの視界を蝕んだ。大きな影が落とされる。

ブラッキーは舌打ちをして腹立ち紛れに、風で飛ばされないようボーマンダの首にしがみついているジュペッタに向けて叫んだ。

「あいつの姿は忘れてないよな！ 種族はピカチュウだぞ！ ピカチュウ！ 黄色い身体に赤いほっぺ！ それからギザギザの尻尾！ ！ 忘れるんじゃないぞ！！」それから、付け足すように。「今度こそ捕まえる！！」

叫び終える頃にはボーマンダはもう大分高いところにいた。

青い身体は空に溶けて見分けがつかない。翼の赤い点を目を細めて見上げながら「しくじるんじゃないぞ」とブラッキーは呟くように言った。

ジュペッタにだけに向けた言葉ではなかった。自分にも向けた言葉だった。仕事はブラッキーにも等しくあるのだ。

それを果たすために、ブラッキーは動き始めた。身軽に木に駆け登り、大分ジユペッタに痛め付けられた麻袋の縄をほどく。

どさりと地面に落ちた衝撃で目が覚めたらしい。木から降りて、麻袋に近づくとき微かな、鈴を転がすような可愛らしい声の面影を残した苦しそうな掠れ声が聞こえた。

「……て……」

「……ん？」ブラッキーが耳を麻袋に近づける。今度はよく聞こえた。

「……に……げて……リフ……」

逃げて、リフ。

「……チツ」舌打ちをする。「あーあーあー、麻袋につめこまれて散々殴られて蹴られて、仲間の心配かよ。笑える。お涙頂戴の友情劇か。はっ、笑えるね。全く、本当に、笑えるったらありやしない。笑いすぎて涙が出そうだ。誰か、ハンカチーフを持ってないか」

自棄をおこしたように陰のある言葉をばらまいて、ブラッキーは麻袋を器用に背中に背負った。その際に「くっだらねえ」と彼は呟いた。

「お前の仲間もどうせ、あのクソガキの人形がくわえてすぐに戻ってくるだろうよ。そしたら一緒に麻袋につめこんでやるよ。嬉しいだろ。なあ。なあ。なあ。おい、聞いているのかよ」

乱暴にブラッキーは背中をゆすつたが、返事が返ってくることはな

かった。また気絶したのだろうか。

無理もないと思う。捕らえる前も、随分とジュペッタとボーマンドに痛めつけられていたのだから。

「つまんねえの」と彼は呟くように言った。

密生する木々の隙間に紛れて、そのさまを見ている影があった。

「可哀想に」

影は呟く。呟いて、くるりとその場で一回転して、自分の尻尾を捕まえて抱きつく。その体勢で哀れなものを見るような視線を、独言を絶えず呟きながら進むブラッキーに注いだ。
小さな笑い声その口からこぼれた。

「どうせさあ、顔をあわせることもないだろうからさあ、今謝っておくけど」

影は愉快そうだった。

「ごめんね」

でもまあ、聞こえちゃいないか。そう言って、影はまた空中で回った。

くるり、次の瞬間には、その姿は消えてる。

そうして物語は主人公の与り知らぬところで、動き出し始めめるのだ。

0 Prologue (後書き)

あ、主人公でてない。しまった。

どうも、慎です。成分でいうと、残念100%でできてるただの残念なやつです。

更新停滞になる気しかしないですが、精一杯頑張る所存です。よろしくお願いします。

1 missing girl

視界の果てまで青にしめられていた。

雲まで手を伸ばせば届きそうだと、ジュペッタは思った。もっとも雲に触れる、そこまで高くなれば地上を把握するのが難しくなるので昇りはしないが。今探してるのは極めて小さな者だ。

「黄色の身体、赤いほっぺ」ジュペッタは記憶を反芻しながら呟く。
「あと、ぎざぎざの尻尾！」

探し者の特徴がそろつ。

はしゃいだ笑い声をあげて、ジュペッタはボーマンダの首に回した腕に力を込めた。

「バルト。ねえ、バルト、バルト」声には妙な熱がある。「黄色の身体、赤いほっぺ、ぎざぎざの尻尾！ そいつをさっさと捕まえてさあ、そうしたら、帰ろう。帰って、師匠に褒められて、そしたらきっといい気持ちなんだろうね」

ボーマンダは応えない。

それでもジュペッタは構わなかった。くすくすと笑いはじめた。

返事があるのか、ないのか、そんなことは全てどうでもいいことだった。

ボーマンダのバルトはジュペッタにとってはただの、自分の意のままに動く人形でしかなかったのだから。そしてジュペッタは玩具を気にかける子供ではなかった。

光が瞼の裏側をしきりに刺激してくる。

なんだか「さっさと起きろよ」とせつつかれてるような気がして、しばらく赤子のようにぐずった後に、仕方なしに彼女は瞼を持ち上げた。

瞬間、開けた視界の中央にあつた太陽から放たれた強い光が真っ直ぐと目に飛び込んで、彼女は小さな悲鳴をあげて反射的にまた瞼をおろした。

「何なんだよもう……」

卑屈な声でぼそぼそと寝起きの掠れ声で文句を言いながらごろんと身体を横転させ、うつ伏せになる。そこで初めて自分が今まで仰向けに寝転がっていたことを知った。

顎の下にかさかさとした感触のものがあたってる。

二度寝の世界にダイブしようにも、先ほど直視した太陽の残像が頭の中でちらついて、何だか落ち着かない。仕方なしにまた瞼を持ち上げて——「どこ？」彼女は呟いた。

かさかさとした感触のものは落ち葉だった。大分色素の抜けた、何とも味気ない色をした落ち葉の絨毯の上に彼女はいた。

もそもそと首だけを動かして辺りを見渡せば、ここが森だと言うことがわかる。ただ木々は見てるだけで寒くなるような、裸同然の

姿がほとんどだった。木の皮の色ばかり目立ってきつと今は秋な
んだろうな、と彼女は推測した。正しかった。

情けなくその場にうつ伏せになったまま彼女はようやく頭を働か
せはじめた。

「……えーとお」めんどくさそうな声音だった。「何でここにいる
んだっけ」

確か、私は——そこまで思ったところで彼女は顔をしかめた。
思い出せないのだ。眠りに落ちる直前のことが少しも——全くとい
っていいほど、思い出せないのだ。

暗い色をした靄が彼女の心の中で立ち込め始める。

「えーとお」と再度言うその声には切迫したものが入っていた。眉
が寄せられ、表情が追い詰められた者のように強張っていく。

目が揺れ始めた。

「確か、確か、確か——ああ、待てよ、確か……」彼女は呻いた。
「だめだ、思い出せない」

何ということだ、と茫然としてる彼女をさらに強い驚愕が襲う。
辺りのものを見たら思い出せるかもしれない、と身を起こそうと落
ち葉に手をついた時だった。

「え……？」

声は不格好なほど揺れていた。

視界の下方に映る腕にぎよっとする。片方を目の前で持ってきて、
彼女は「そんな」と呆氣にとられた声をこぼした。

指をぎこちなく動かす。ぎこちなく閉じたり開いたり——その通りに動く、そのことが示すのはその手が間違いない彼女のものだということだ。

でもこんな指の短い、混じりけのない黄色の手が——私の手？

「いや」首を固い動作で振る。「いやいや、まさか、そんな馬鹿な。私の手はもっとこう——」

言いかけて口をつぐむ。自分の手のことすら思い出せないなんて、そんなことありえる？

「……っ」

バツと身を起こし、自分の身体のアチコチを見た。目の届くところのだいたいが手と同じ、黄色。

足は短かった。胴が少し長い。気が狂ったかのように顔に手を這わせていたら、頬にあたるところで不意にビリビリとして、あわてて手を離れた。

頭の上に手を伸ばすと、細長い何かが掴めた。掴んで、目の前に引っ張ってきて、痛いことに気づく。それは身体の一部だったのだ。やはり黄色をした、先の方だけ黒いそれは耳だった。

そして一番の、驚くべきことは。

「尻尾……」今までで一番震えた声だった。「尻尾だって！ 私に尻尾がある！」

そんなの——ありえない、と言おうとしていたのけれど、直前の記憶すらない奴がそんなこと断定できる？ 彼女はまた口をつぐんだ。

けれど自分はこんな姿——「こんな姿じゃなかったような気がする」

それは果たしてただの記憶喪失者の妄言か、それとも。心の動揺を示すかのように、彼女の隣で尻尾が揺れていた。根本の茶色いその尻尾にすがりつくものを求めるかのように、彼女は抱きつく。

その姿は彼女には知るよしもないことなのだが——間違えるのこのない、一人の小柄なピカチュウの姿だった。

「どうしよう……」

ほとんど泣きそうな声でピカチュウは呟くように言う。

——その時だった。

形容するなら「ボコッ」そんな感じの音が背後でしただ。

弾かれたように振り返ったピカチュウの黒い双眸に世にも奇妙な

——彼女にとってはそう感じられた——生物の姿が映る。

濃緑に少し青をかけたような色と柔らかいクリーム色の丸い頭の、鼻先が突き出た、目の細い——それはヒノアラシだった。ピカチュウはやっぱりその事を知らなかったのだけれど。

ヒノアラシは頭しか地上に出していなかった。身体は地下だった。

彼は彼で驚いていた。

だって“穴を掘る”でつくった長いトンネルの先、頭を出した途端に黄色のポケモン——彼はピカチュウという種族を知らなかった——に睨まれている。青天の霹靂である。思わず「ひ、ひい」と間拔けた声をこぼしてしまう。

しばらく二人は視線を合わせたままビクリとも動かなかった。風がその間を吹き抜ける。

その風が止んだとき、二人は同時に動き出していた。

「待てえええ！」

「来るなあああ！」

地を蹴って飛び出すピカチュウ、自分がつくった穴に、身を翻して再度潜り込むヒノアラシ。

どちらの行動も風のように速いものだった。しかし、ピカチュウの方が僅かに勝っていた。

「離せ！ 離せってば！」

「あ、ちよっと！」ヒノアラシの片足を掴んだままピカチュウは叫んだ。「ちよっと！ 土をかけないでってば——あいた！」

もう片方の自由な足でヒノアラシは滅茶苦茶に穴の入り口の土を蹴る。手でも掻いて、土を押し出した。そうして出された土は遠慮なしにビシバシとピカチュウに直撃して——意外と痛いのだ。土の中に混じる小石がそう感じさせるのだろう。

「離せってばあああ！！」ヒノアラシが絶叫する。

「ちょ——いだっ、待って——あだだ！ だから待ってって」

ことさら大きな石がガンツと鈍い音をたててピカチュウの頭に直撃した。それがスイッチだった。

ピカチュウの動きがピタリと止んで、ヒノアラシが訝ったその瞬間である。

「待てって言うてんだろぅがぁあぁあ!!」

その小柄な身体から出たとはとても思えない野太い怒声にヒノアラシは身を反射的に震わせた。怯んだ。その一瞬をピカチュウは見逃さない。

「フンツ!」とこちらもやはり野太い掛け声をあげて、ピカチュウはヒノアラシを引きずり出した。

さながら一本釣りのようにピカチュウに掴まれた足を支点に、ぐるんとヒノアラシの身体が宙を舞う——その直後に「ギャツ」彼は地面に叩きつけられる。何とも痛そうな悲鳴だった。

地面に引きずりだされたらだされたで、今度は這って逃げようとする。そんなヒノアラシの背中にまたがるように、素早くピカチュウが飛び乗った。

「ひっ!」という悲鳴がヒノアラシの口からこぼれた。

「な、なにするんだよ! 離せよ! 離せ!!」

「離せ離せってさっきからそればかり。人をお化けみたいに扱って——」

「喋れるポケモンと出会ったら逃げろって言われてるんだよ!」

ピカチュウの耳がぴくりと動いた。

鼻もヒクヒクと動く。何だか焦げ臭くないか、あとなんかこいつの背中がやけに熱いような——気のせいだと思うことにした。

ヒノアラシはまだ暴れている。

しかしピカチュウが「傷つけたりとかはしないから」と言うと、その抵抗が一瞬止む。振り返りながらピカチュウを見上げる顔が「本当に？」と問う。ピカチュウは頷いた。

「まあ、こんなに小さい奴だし……」

小柄が幸いしたらしい。

かちんときたがそれを抑えて、ピカチュウはすっかり抵抗を止めたヒノアラシに話しかけた。いつのまにか匂いはなくなっていた。

「さっきのさ、喋れる、とかさ、逃げる、とかさ——」いや、引つ掛かるのはそこではない。「——ポケモン？」

舌にのせて押し出したは単語妙にざらついてるように思えた。

強い違和感がピカチュウを襲って、こめかみを押さえながら再び彼女はヒノアラシに問う。

「ポケモン。なにそれ」

「……冗談言ってる？」ちらりとヒノアラシがピカチュウを見上げ、その頭をピカチュウに蹴飛ばされた。

「大真面目だから」

「いたっ！ 何するんだよ！」

「うっさいなあ、もう。さっさと答えないともう一度蹴るよ」

「……ポケモンっていうのは」渋々と彼は話しはじめた。「君のとだよ。あるいは、ぼく」

「……わお、哲学的な答えだね」

「冗談言ってる？」ピカチュウが再度蹴飛ばした。「……横暴な」

「話を続けて」

「どお説明していいかなんてわかんないって」ヒノアラシが眉尻を下げた。「だってポケモンって当たり前すぎて本当、どう説明していいか……ね、実はぼくのことからかってるんじゃないの？」

「……」

また蹴飛ばされるかな、とヒノアラシは思ったけどピカチュウは微動だにしない。ひどいしかめっ面で、深い思考に気をとられているようだった。

「ポケモン……ねえ、私もポケモン？」

「そおなんじゃない？ 種族わかんないけど。ここら辺に住んでないでしょ？ そんなまっ黄色の身体、一度見たら忘れられないはずだし」

「つまりは大きなくりのことか……じゃあ、あなたもポケモン？」

「当たり前。ぼくはポケモンのヒノアラシという種族の——」言いかけて、口をつぐむ。「知らない人に名前教えちゃいけない言われているんだっただ」

「誰に？」

「お母さん」

深いため息が少年の口からこぼれた。

「あと喋れるポケモンを見たら逃げろって……そうも言われてるけど、さあ」

「何故逃げるの？」

「わかんない。けど、母さんはそう言うんだ。そして母さんの言うことはだいたいいつも正しい」ヒノアラシはそこでまたピカチュウを見上げた。「守れるかどうかは別として」

「悪かったね」

ようやくピカチュウはこのヒノアラシに対して申し訳なさを感じた。考えれば足を掴んで引きずり出すなんて少し、いや大分酷いことをしたような気も――「悪かったよ」言いながら、ピカチュウはヒノアラシから離れた。

「何だよ気持ち悪いなあ」急にしおらしくなったピカチュウを訝りながらもヒノアラシは身を起こし、身体についた落ち葉をはたいて落とした。

それを尻目にピカチュウは歩き出す。

ヒノアラシは自分のことを知らないと言った。なら、もうあまり用はない。辺りを歩き回って変な言い方だが、自分の手がかりを探ろうと思ったのだ。

記憶喪失ながらも他人に彼女は頼ろうとはしなかった。

一方、晴れて自由の身になったヒノアラシは穴の近くに帰りながら、その小さな背中を見つめた。変わった奴だったな、そう思いながら。けれどももう少し話したかったような気も、そう思いながら。

穴に上半身をつっ込んだ。けれどすぐさま身体は抜かれる。その手には引きずり出される際に手放してしまった擦りきれた革の靴があつて、彼はそれを肩にかけると、ピカチュウを追いかけるために走りはじめた。

「何か用」

聞こえた落ち葉を蹴散らす足音に振り返ったピカチュウが、ヒノアラシを見て訝しそうな声でそう問う。

その隣に並びながらヒノアラシは「ねえ、どこに行くの」とそう問いかえした。ピカチュウが首を振った。

「別に。少し歩き回ろうかと思って」

「一人で？　こちら辺、すごく危ないよ。特に今は冬眠前のリングマたちの気がすくたつてて——」

「リングマ？　なにそれ」不思議そうな声がヒノアラシの話を遮った。

「そんなことも知らないの？　世間知らずだね」

ピカチュウが尻尾でヒノアラシを叩いた。

尻尾を動かすのは不思議な感じがしたけど、ちゃんと動いてくれた。

「きみさ、よく横暴って言われない？」

「うっさいなあ。それで、答えてよ。リングマって何？」

「リングマっていうのはねえ……」

ヒノアラシが歩みを止めたので、必然的にピカチュウも止まる。

「こーんな」言いながらヒノアラシが腕を左右に限界まで伸ばす。背中も逸らして、自分を大きくみせようとしている。「おっきな奴さ！　たぶん世界でいちばん大きいよ！」

「ふうん……」自分で訊いときながら気のない返事をするピカチュウ。

「あ、馬鹿にしてるでしょ。さてはリングマを知らないね、きみ。

奴らはすごいんだよ。手の先にはすつごく長くて鋭い爪があつて、
どんな木もポケモンも奴らにかかったら――」

「へえ」

ヒノアラシの話を最後まで聞かずに、ピカチュウは歩き始めてしまふ。ヒノアラシが跳びはねながらそのあとを追った。

「ひどいなあ。最後まで聞いてよ！」

「ああうん、ごめんね。だけどあまり興味がなくなつて……ていうかねえ、あなたなんでついてくるの？」

「え」ヒノアラシはまごついた。「そんなのぼくの自由だろ！」

「お母さんに私と話したらダメって言われたんでしょ」

「バレなきやいいんだよ、結局。それに」ヒノアラシは呟くように言った。「喋れるポケモンと会う機会は少ないんだ。母さんはよくふもとの町に行くからそうでもないんだけど、ぼくは滅多に連れていつてもらえないから……連れていつてくれても、町の外で待たされるし」

「……」

「話したのは君が初めてかも。ああ、母さんを除いたら確かにそうだ。ねえ、ちょっとついていくのもダメ？」

「好きにしたら」

ぼそりとそう言うと、ヒノアラシは嬉しそうに笑った。出会いが
出会いだっただけ、今二人の間を流れるのは友達のそれだ。

「それでさあ――」母親以外の話し相手が嬉しいのか、ヒノアラシ
がまた話を振ってくる。少し鬱陶しいような気もしたが、これだよ
かったのかもしれない。

一人になると自分が記憶喪失だというその事態に、吞まれそう
だった。

「聞いてる？」ヒノアラシは少し不満げだ。
「聞いてるよ」とピカチュウは嘯く。

「きみ、何であんなところで寝てたの？」

「……」ピカチュウは答えに困った。「何でだろう」

「何でだろうって、自分のことでしょ」

「そうだけど……」

「じゃあさ、きみ、実はすごく強かったりする？」

「強いつて……」

「ここはね」ヒノアラシが説明をはじめた。「すごく危ないところなんだ」

「へえ」今度は興味をもつてることを示す相槌だ。

「馬鹿みたいに強いポケモンばかりが住んでるの。ほんと、母さんなしじゃとてもこの山から降りられる気がしないんだ」

「ああ、だから誰とも」

「無断で動いたら怒られるだけじゃなくて、本当に死ぬかもしれないからね。町に自分の力で降りることもできないんだ。だから誰とも話せない」

「そんなに……」

でも、なら何でそんな山の奥深くに暮らしてるのだろう？

その疑問をピカチュウに抱かせる間もなく、ヒノアラシは「だからさあ」と話を続けた。

「こんな危険なところに一人で寝てたきみは、もしかしたらすごく強いんじゃないかと」

「そうかな……」ピカチュウは落ち着かなさそうだった。「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「自分のことでしょ？」

「でもわからないよ」

その言葉の意味を読み取れず、ヒノアラシが首を傾げた。

「どういうこと？」

ピカチュウはそれに答えることができない。自分でもわからないことを、どうして説明できようか。

「……じゃあ、わざを見せてよ、わざ。それでだいたい強さはわかる」
「気まずい空気を打破するかのように、ヒノアラシはそう言った。
「わざ？」

「あれ、言語の地方の差分かな……でもわざはわざだし、ほら、わざだよ！」

「わからないって」

わざ。

何かの技術のことを言ってるのだろうか。そう予測をつけるピカチュウにヒノアラシはとんでもないことを言う。

「こう、火をブワァーッと出したり、爪でズサズサーッとやって木切り裂いたり、岩砕いたり——あとさっき見せたあれ！ “穴を掘る！”」

「……」

火をブワァーッと出したり、爪でズサズサーッとやって木切り裂いたり、岩砕いたり。

そして穴を掘るのだ。最後のだけ何だかやけに現実的だ。せっせ

とスコップを持って土を掘り返すヒノアラシの姿がピカチュウの脳裏に映る。

様子でピカチュウに通じてないことをヒノアラシは察したのだろう。ヒノアラシが「仕方ないなあ」と言わんばかりに、実際に言つて、両手のその場につけた。

「後ろにもものがあると危ないから」ということらしいが、ピカチュウにはさっぱりだ。

見てて、とヒノアラシはピカチュウに言う。それから離れて、とも。ピカチュウは大人しくそれに従った。

最初、数歩離れたところで何うヒノアラシに目立った変化はなかった。ただ出会い頭の乱闘の時のあの何かが焦げたような匂いが鼻をついて、ピカチュウは思わず辺りを見回した。

それを見てヒノアラシが困ったように笑った。

「ぼくはあまり強くないから出したい時にすぐに出せるわけじゃないんだ。半人前だからどうしても少し時間がかかる」

へえ。でも何が？

首を傾げるピカチュウの黒い両眼が、次の瞬間見開かれた。

「でたあ！」と歓声をあげる少年の背中の特長から——火が吹き出ているのだ！

そう大きなものではないけど、けれど確かに火が、赤々と燃え盛る炎が——「なにこれ」ピカチュウは目をこすった。

目の前の光景が信じられない。しかしいくら擦ろうと、炎は変わらずにそこにあった。

やがて炎は尽きる。ヒノアラシが歩み寄ってきた。

「母さんは口からでも出せるんだけど、背中 of 器官から口に火を持つてくるのは難しくって、ぼくはまだ——」ヒノアラシがきよとんとした。「どうしたの、そんな可笑しな顔をして」

「え、あ、いや、でも、だって」

不明瞭な言葉ばかりが口について出てくる。ヒノアラシは変わらずきよとんとする。

ピカチュウはなんとか言葉を喋ろうとする。けれど、何を言っているか——あの小さな鮮烈な炎だけが脳裏をちらついて、口にまで意識が回らない。

背中から炎が吹き出たのだ。

信じられる？ とピカチュウは自分に問う。けれど確かに彼女は炎を見た。なら信じるしかない。

けどあんな、だって、だって——有り得ないじゃないか。けれど記憶を持ってない彼女は何をもって炎を有り得ないか、それを説明することができない。

ただ彼女は自身の心の奥にあった何か——言葉にするなら何か、大きな“前提”があ of 炎に灰もなく燃やし尽くされたことを知った。一瞬にして、彼女は彼女の世界をつくりかえられた。否応なしに。

前の彼女の世界はあ of 炎に焼き捨てられたのだ。新しい世界の中で、彼女は孤独のただ中であつた。

「ねえ」ヒノアラシの声に心配が混ざつた。「本当に、大丈夫？ 具合が悪いならこの近くのぼく of 家に——」

「いや……大丈夫だよ」

かすれた声でピカチュウは答える。

彼女は急にこの少年が恐ろしくなった。数歩後ずさって、背中がトン、と木にぶつかる。

「本当に大丈夫？」と心配に顔を歪めたヒノアラシが近づいてくるが――手を振ってピカチュウはそれを止めた。

ビクリと身を震わせて、ヒノアラシは立ち止まった。

空気が固い。

前の気まずさなんか、可愛いものと思えるほどに。何が急にピカチュウを変えたのか全くわからないヒノアラシは落ち着かなさげだ。

暗い眼差しでピカチュウはそんな彼を見ていた。

明るい会話に戻ろうと、ヒノアラシが彼女に話を振った。

「さっきのは“火の粉”。炎タイプのわざだよ。ぼくは炎タイプだからどうしても得意なものは炎タイプになっちゃうんだ。けど“穴を掘る”も地面タイプだけど結構使いやすく――」

知らない単語がポンポンと飛び出すその口が恐ろしかった。

先程までは知らない単語を聞いても笑っていられた。その余裕はもうない。

黒い双眸が揺れ始めた。

ヒノアラシはまだ喋っている。不穏な空気を吹き飛ばそうと、けれどそれは空回って、余計にピカチュウを追い詰めただけだった。ピカチュウにはもうその言葉は呪詛のようにしか聞こえない。実際はそんなことは全くなかったのだけれど。ヒノアラシは真剣にピカチュウを心配していた。

けれど——でも、怖くて。

「もう何も言わないで」

その言葉にピタリとヒノアラシは動きを止めた。

呪いの言葉にしか聞こえなかった言葉の奔流が止んで、ほっとするだろうと思ったのに——ヒノアラシの顔を見た時、ピカチュウの胸に広がったのはただの後悔だった。そしてヒノアラシの胸に広がったのも、また。

傷つけた。

あんなこと言わなければよかった。

嫌われた。

初めて友達になれたかもしれないのに。

じんわりと胸に広がる暗い色の感情に打ちひしがれる二人を――
遙か上空から見つめる一つの影があった。

「黄色の身体、赤いほっぺ」ジュペッタは記憶を反芻しながら呟く。
「あと、ぎざぎざの尻尾！」

吹き飛ばされないよう、ボーマンダのバルトの首に掴まったジュペッタの機嫌は最高潮だった。
だった。

だってつい今、探している者が見つかったのだ。子供らしい直情的な喜びを顔中に浮かべてジュペッタは笑った。

黄色の身体、赤いほっぺ、ぎざぎざの尻尾――ピカチュウの特徴。

「見つけた」

大きな嵐が始まろうとしていた。

1 missing girl (後書き)

あ、主人公とパートナーの名前出してない。しま(ry

くっ…しかし長編って難しい。単発ばっか書いてる奴なので苦労の連続です。他の作家様方まじすばらしい。

2 Fire & Fagot (前書き)

ふう…なんだ、外はただの土砂降りか（リアルに）

ちよっくら土下座の練習してくるぜ！ はっ！ ジャンピーングッ

！↑一度作者は痛い目にあうべき。

…というわけで（何が）、本当に遅くなつてすいません。楽しめていただけるかは非常に疑問ですが、殺伐とした

2 Fire & Fagot

英雄ジェレスの武勲、そこで彼の冒険の舞台として使われているのは今なお大陸随一の標高を誇る大山脈だ。

子供の寝つかせる時にも使われるほど有名な話である。だから人々はほとんどが大山脈のことを知っていた。だからだろうか、大山脈は大山脈と呼ばれるだけで正式名称を持たない。

持たなくとも大山脈は人々の間で、しっかりとその存在を根付かせていたのだから、というのも一因だと思われる。

前述のジェレスが渡り歩いた冒険の舞台として、あるいは——有史以来誰一人としてその向こう側に行ったことがないという畏怖を抱きざるをえない土地として。

何度となく挑んだ屈強な探検家が探検隊を返り討ちにしたのは大山脈擁するたった二つの不思議のダンジョンだった。

一つは 大山脈のふもと、もう一つは 大山脈。
名前からも推察できる通り 大山脈のふもと を越えた先に 大山脈 はある。

そこに挑み、帰ってきたものは未だいない。

——鬱蒼とした森。

腐りかかった矢印のついた看板には足形文字で簡単にこう記して

あつた。

“この先、不思議のダンジョン　大山脈のふもと”

看板の老朽に似合う禿げがかつたインクで記されたその上には赤いペンキで“はやまるな”と書きされていた。難攻不落のダンジョンはいつしか、体のいい自殺場所となっていた。

さて、今その看板の脇を目にも止まらない速さで通り抜けた影があつた。

その影に平行して十数歩向こうで走るも別の影もあつた。

二つの影は看板などには一瞥もしない。ただどちらもまるで風にもなるうとするかのように駆けてる。しかしここは森の中、妨げとなる太い木の幹が幾つも天に向かって伸びていた。しかしそれは二人はそれを器用に避けていく。

全くのスピードを落とさずに木を避けるその走り方は老練された技術を感じさせた。

「やるなあ」

二つの影の片割れ、黒い方がぼそりと呟いた。彼の独言は続く。
「ただのチンピラかと思っただけ……何だよ、これ」不満に顔が歪んだ。「ピカチュウの時もただけだよ、聞いてねえつつうんだよ。こんな手練れがいるなんてよお」

苛立ちを精一杯こめた舌打ちを一つ溢し、黒い影——ブラッキーはその場で軽く跳ねた。

身体を捻って対峙してるもう一つの影の方へ顔を向け、濃い紫の光を目の前にあつめる。

濃紫の光の球はみるみるうちに大きくなっていく。紫が集まりすぎ

た箇所はもはや真っ黒だ。外側のみを紫に縁取られた、闇を集めたかのような黒い球は軽くブラッキーを呑み込める大きさに育っている。秒にも満たない一瞬で。

言うまでもなく異常なはやさだった。

「シャドーボール」

ぼそりと呟いて、球を放つ。それから彼は軽快に着地をきめてみせた。

向かってくる球を見て、彼女は眉間に眉を寄せた。
しかし恐れはない。慣れた動作で迎撃の体勢に入る。

口を薄く開ける。そこから深々と息を吸い込んで、ちょっと喉をそらして——次の瞬間に吐くのは彼女——マグマラシご自慢の超高温の火炎だ。

口元から熱気がすごい。しかし溶けそうなほどの温度さえ心地いと感じるのはやはり炎タイプの性ゆえだろうか。熱ければ熱いほどそれは心地よさに転換する。

ぬるま湯に身を浸かせたときのような快さを感じながらマグマラシは吐き出す炎により力を込めた。

範囲より威力を重視した炎は細く、真っ直ぐと一直線にのびている。そしてその先には——黒みがかかった紫色のエネルギーの高濃縮体——“シャドーボール”がある。

“シャドーボール”の黒と“火焰放射”の赤が空中でぶつかり合

い、弾かれた余剰のエネルギーがあたりに拡散した。木は反り、葉は吹き飛び、大地は決れる。白い煙がもくもくと辺りにたちこめた。

エネルギー体と炎の対決は、わずかに炎の方が勝っていた。

高い炎圧で“シャドーボール”を押し退けた“火焰放射”は真つ先と敵に向かい——しかし難なく弾かれた。

「やるじゃん」晴れた煙の向こうで、敵が小馬鹿にするようにうつつらと笑んだ。

気づいた時はもう距離は大分近い。

“シャドーボール”を放った直後にブラッキーがすぐに駆け出していたからだ。迎撃をしていたマグマシはそれに気づいていなかった。視界を阻んでいた煙も一因だ。

だからだろうか、白い煙から飛び出してきたブラッキーの第一撃を食らってしまう。

華奢な肩にブラッキーの牙が食い込む。マグマシは望まないその荷物を降り下ろそうと、口をそちらの方に向けた。

しかし炎が噴射される直前、「おっと」とブラッキーは素早く身を引いた。

慣れたステップで後退り、マグマシから距離をとる。しかし最初の時ほど距離はとらず、数歩のところにやにやと笑っている。

肩の傷を素早く確認する。痛い。が、それほど深くはなさそうだ。戦闘に支障をきたすほどではない。

そう冷静に傷を分析しながらもマグマシはブラッキーを警戒した。

そして身体中に緊張を帯びさせ、いつでも飛び出せるように身構える。

ブラッキーも悠々と身構えた。

身じろぎもせず、睨み合う。

険しい顔つきのマグマラシと薄ら笑いのブラッキー。共通しているのは剣呑な眼光だけだ。

お互いの隙を探る、それだけで時間だけが過ぎる。

——最初に動いたのはブラッキーだった。

マグマラシが睨むブラッキーの姿が唐突にぶれる。直後、消えた。

そして気づいたときには——「騙し討ち」「背後をとられてる。必ず当たるわさである。当てられて吹き飛ばされたマグマラシはしかし、空中で一度回って、華麗に着地をきめてみせた。

遠距離系のわざの対決は終わった。

こんどは近接系のわざと身のこなしが目に物見せる闘いに一転したのだ。

マグマラシの着地は見事だった。

走り方同様に老練したものを感ぜさせるその動作に意図せずピュウイ、と品のない口笛がブラッキーの口から溢れる。

「驚いた」

睨みあうように向かい合ったままブラッキーは呟くように言う。
口元が不快そうに歪んでいた。

「何だよ、あんた。なあ、あり得ないよ。なあ、なあ、なあ」可笑しくて仕方がないかのように。「ほんと、笑える。こんな世界の果てにもあんたのような奴がいるんだな」

「……」マグマラシは答えない。

「けど何で今出るかなあ。何で仕事に出るのかなあ」ブラッキーはまた笑った。「すつごく目障りだよ、あんた」

マグマラシはやっぱり答えなかった。

無言を貫く彼女をやはりブラッキーは不快そうに見ていた。しかし直後、彼の視界に写るマグマラシの姿が揺れ動いた。目の錯覚ではない。

まるで瞬きして、その間に動いたかのように世界がなんかやけに断片的だ。別にブラッキーは瞬きをしてたわけではなかった。

ああ、電光石火だ。長年の戦いの記憶を蓄えた脳はすぐに答えを弾き出す。

そうとわかれば対処法は簡単だ。

電光石火の利点はその速さ、しかしそれを上回る短所が直線的にしか進めないこと、一度に飛躍できる距離が短いことである。

横にブラッキーは飛んだ。速さをのせたマグマラシの電光石火は空を切る。

ブラッキーがいた箇所を通り抜ける刹那、空いた脇を逃す彼ではない。

体当たりを叩き込もうと、彼の足が地を蹴る。

急所に当たった——当たるはずだった。

触れるか触れないかの刹那、マグマラシの背中から炎が吹き出た。

「あ……っ……」

小さな火柱が森にたつ。

炎は上に伸びるだけでなく、放射状に伸びていた。赤々と、全てを灰にかえすかのような勢いで。

胸のところが炎に噛まれた。

その痛みに出そうになるうめきを噛み潰しながら「ほんと」とブラッキーは呟いた。「何で、仕事中に限ってこんなやつが」
後退を余儀なくされる。

電光石火は囷だったのだ。

まんまと引っ掛かったブラッキーは“噴火”の直撃を受けて、手酷い火傷を負った。先ほどあんなに体力を減らしてこれなのだ、もし相手が万全だったら、と思うとブラッキーは空恐ろしくなる。“噴火”は使用者の体力が高ければ高いほど威力の上がる技なのである。

背中に炎を背負ったマグマラシが初めて、口を開いた。

「この地から、どうか」静かな声だった。「どうか立ち去ってください」

「わからないね」ブラッキーは口をへ字に曲げた。「何であんたのような人がこんな最果ての地にいるんだ。わからないね。なあ、何の目的があつて？」

「……去らないというなら」

「へえ、どうするんだ？ 俺を丸焦げにでもする？ はは、愉快だな。ブラッキーの丸焼きを作ろうっていうわけか」真剣な声音で彼は言った。「やめとけ。絶対不味いぞ」

卑屈にブラッキーは笑う。その体勢はいつでも跳べるように足の筋に力をこめたままの前傾姿勢だ。戦闘意欲はむしろ増してるように見えた。

一つ首を振って、マグマラシは微かな嘆息をこぼした。そんな彼女にブラッキーは状況に似合わない軽薄な口調で話しかけた。

「思い出した。俺、あんたを見たことがあるわ」

「……」マグマラシの身体が微かに揺れた。

「ブラックリスト」愉快そうにブラッキーが笑った。「最重要注意人物。そのリストに写真載ってたな。何をしでかしたかは知らないけどよお、見かけたらすぐに捕まえろって上からのお達しだ」

「……」

「その見返りがまた、すごくてさあ」

ブラッキーが歯を見せて笑った。

「なあ、ちょっと、一緒に来いよ。俺の幸せのために」

「……」マグマラシは無言でまた一つ、首を振った。言葉すらないその反応はブラッキーの気に入るものではなかった。

「……ちっ、白けるなあ」

言った直後、至近距離の火焰放射が彼を襲う。

軽快な動作で斜め前に跳んで避ける。そのまま駆け出した。

その姿がぶれる。

「電光石火を使えるのはお前だけじゃないよ、と」

電光石火を避けるのは簡単だ。ブラッキーと同じように電光石火の直線ラインから外れようとマグマラシは横に跳ぶ。

——だがしかし、身体の動きが鈍い。

一応は横にずれたおかげで急所は免れたものの、電光石火の直撃を食らったマグマラシの身体は吹き飛び、木に叩きつけられる。

叩きつけられる彼女を見てブラッキーは不意にボーマンダに彼女のように叩きつけられたことを思い出した。そうすると芋づる式にジュペッタも思い出した。痛みが蘇ると共に、一気に不快な気分になった。

「……ちゃんと仕事してるんだろうなあ」

ブラッキーの仕事の麻袋を運ぶというのはとりあえず一時中断していた。マグマラシがブラッキーをつけていたことに彼が感づいたからだ。

どきついあやしい光を食らわせて——そうすれば起きたとしても朦朧として動けないのだ——隠してきた。直後に逆にマグマラシに奇襲をかけ、そして戦闘に突入し、冒頭に戻るという次第である。

叩きつけられて、ずるずると木の根本にうずくまったマグマラシは信じられないものを見るような目でブラッキーを見上げていた。

その唇が動き、掠れた声が「いつの間に」と問う。

めんどくさそうに彼が「最初に」と答える。

「自分の有利な状況に持っていくのが第一撃であるべきなんだ」彼は言う。「おまけに俺は悪タイプだからどうにも苦手で、しかも発動が遅くて——時間稼ぎの無駄話につきあってくれてありがとーご

ざいます」

軽薄な口調でそう言い、からからと笑うブラッキーにぎり、とマグマラシが奥歯を噛み締めた。

しかしそうしたところで“毒々”ですっかりダメになった身体が回復するわけでもない。

ならば、とマグマラシの頭の計算機が目まぐるしい速さで動き出す。やがて弾き出された答えは、一度身を引いて体制を建て直す、というものだった。

ここら辺はマグマラシ馴染みの土地である。野生の体力回復のオレンになる木も、毒を取り除くモモンになる木の場所も把握してる。目を瞑ってもたどりつけるくらいだ。

それに。

マグマラシには懸念があった。ここから程近い不思議のダンジョン 大山脈のふもと、そしてそこを越えた向こうにある 大山脈、その間にある中間の箇所。

そこには彼女にとって何物にも変えがたい、庇護を幾重にも張り巡らして育ててきた一人の——敵がこのブラッキー一人で、無事だといいいのだけど。マグマラシは強くそう思った。

とにかく一度を身をひかなくては。

痛む背中に力を込めて、四肢を大地につけ、筋に力を入れ、さあ飛び出そうという時に——彼女は愕然とした。

「 黒い眼差し 」

見上げた先、赤い目を不気味に光らせたブラッキーが笑っていた。

「じ、めんね……」

蚊の鳴くような小さな声だった。

頑張って頑張って耳をすませて、ようやく聞こえるほどの微かな声をしかしピカチュウは確かに聞いた。聞いてしまった。

まるで打たれたかのように顔を歪めて、ヒノアラシが先ほどのピカチュウにならうかのように数歩、後ずさった。

ピカチュウはそれを絶望的な気持ちで眺める。その口が何か、言葉を紡ごうとして動いて——「あ、の……」ろくな言葉にならなかった。

何で、何で、と何度も思う。何で、こいつが謝っているのだと、何度も。

だって可笑しいじゃないか。可笑しい、可笑しい、すごく可笑しい。

謝るべきは誰だ？——私だ、とピカチュウは自己嫌悪渦巻く胸の中で思った。勝手に怯えたのは私で、酷いことを言ったのは私で、傷つけたのも——ああ、何だかもう。

心中で繰返し自分のことを罵倒する。しかし幾度も思うものの、

言葉に形をなしてはくれない。

思いを言葉に変えることがこんなに難しいとは。

——彼女は謝ろうとした、なのに。

「本当……」ヒノアラシがゆるく首を振った。その口からでたのは、やはり震えた声だった。「ごめんなさい」

「ちがつ——」

そういうことじゃない、とピカチュウは声を張り上げようとした。謝るべきはあなたじゃなくて、謝るべきは、謝るべきは——刹那、世界が揺れた。

咆哮だ。

空気が、震えている。いや、震わせられているのか。それほどまでに凄まじい大音量。

その吠え声が耳の奥で炸裂した瞬間、ピカチュウは確かに世界が揺れたと錯覚した。

けれど何より恐ろしいのはその声に込められたうすら暗い感情の深きことか。まるでこちらを引きずり落とそうと深淵から這い出る手のような——何故かそう思ったとき、鋭い声が飛ぶ。

「危ないっ!」

誰の声か——もちろんヒノアラシのだけれど、それを認識するより先に、不意にピカチュウは自分の周囲がにわかに、まるで時間を速回ししたかのように暗くなったことに気づいた。

その瞬間から、世界は途端に遅くなった。

音が無くなった。

全てが遅い。とにかく遅い。

何故暗くなったのか、それを確かめるために見上げようとする自分の動作も、空の青から抜け出てきたような青い身体の怪物が自分に向かつて一直線に飛んでくるさまも、何もかも遅すぎる。おまけに全くの無音なものだからひどく現実味がない。

遅い世界の中、意識だけは通常通りだった。だからか食い違う頭と身体が速度が気持ち悪かった。

周囲から切り取られたような自分だけの世界で、青い身体の怪物の凶悪な顔つきを見た。薄く開いた口、そこから覗く鋭利な牙の列も、感情の色のない双眸も、遅くて音の無い世界で見ていた。

見ていただけだった。

だから、また鋭く飛んだ、やはり遅いトーンの「何をしているんだ！」という声が無かったら、きつと——物語はここで尽きていたのかもしれない。

横に飛ぶ。と、途端に速さが戻る。音の奔流が耳に飛び込む。けれど気にする間もない。飛び込んだ先に、運悪くヒノアラシが

いたのだ。幼い少年に小柄とはいえピカチュウの身体を受け止めるほどの力はなく、はずみでそのまま二人ともひっくり返って数度、視界がぐるりと回る。木にぶつかってようやく止まった。

ずきずきと痛みを主張する痛覚が気絶することを許さなかった。

打った身体の箇所を気にしながらピカチュウは身を起こし、自分が転がってきた方を見て——ひゅ、と微かな悲鳴がその口からこぼれた。

可能だったら彼女はもっと大きな声で絶叫していただろう。

大きな身体をしていた。こちら側に背中を向けている大きな身体、色はスローの世界で見た通りの青。大きな赤い翼がその背中からはえている。

ああ、これは。いつそ気絶した方がよかったのかもしれない。

先程までピカチュウが背中を預けていた木が、ピカチュウを二回りしたほどの太さの木がバリバリと無惨な音をたてて噛み砕かれるのを見ながら、彼女はそう思った。

吐き気がした。

「なに、あれ……」同じくその衝撃的な光景を見たヒノアラシの掠れた微かな声に思ったことはただ一つ。

あれは、怪物だ。

常識の範疇の外にいる、忌むべきもの。

今後何度にも渡って相對することになる“敵”にピカチュウが抱いた第一の感想はそんなものだった。

二人の見ている先で、ちょうど今しがた怪物だと思われたボーマンダが木の幹から口を離し、振り返る。

鋭い眼光を受けて二人は戦慄した。時間が経つと共に衝撃が散ると、ゆっくりと恐怖が顔を覗かせてきたのだ。

あの木のように、なるのだろうか。

そう思いながらひどく挟れて、今にも倒れそうな木を見ながらピカチュウは戦いた。怖い、怖い——怖い。一度その語を思い浮かべると、それだけしか考えられなくなる。

小さな胸の内を恐怖が塗りつぶした。

ボーマンダはただ二人を見ている。手を出さない、その不気味さが間違いなく恐怖を助長していた。

ピンと張った一本の細糸のような緊張を含んだ沈黙。

それを破ったのは——「おつかしいなあ」子供のように甲高い声だった。

場違いにも程がある声、しかし恐怖に凝り固まった心には余計に不安を注ぐだけで、ピカチュウとヒノアラシは微動だにしない。張り詰めた固い表情でボーマンダを見つめるだけだ。

しかし、その長い首の陰からひょっこりと、黒っぽい何か顔を覗かせると、やはり僅かな疑問が浮かぶ。

黒っぽい何か——ジュペッタはヒノアラシよりも圧倒的に幼そうだった。未成熟さが隠しきれない顔でジュペッタが笑った。ジッパで封じられた口の端を吊り上げてひどく不格好に、けれど雰囲気

気だけは無邪気に。

「何で反撃しないの？」笑いながら、ピカチュウを見ながら。「昨日の夜みたい、さあ、雷みたいにビリビリするものをつってくると思ったのに、ねえ、何で？」

首を傾げてそう問われて——だけどしかし、ピカチュウには何のことだかわからない。記憶が無いのだから。

無視などではなく、もっと切迫した無言が続く。どうしてもボーマンダの方を伺うように見てしまうピカチュウのそのさまを、ジュペッタはしばらく首を傾げて見ていた。

そして子供は思い付いたように言うのだ。

「別人みたいだなあ」

自分で言った言葉に頷くようにジュペッタは言葉が続ける。

「昨日の夜はあんなに強かったのに。あっちこちに潜んで、そんなちっちゃな身体にくせして、バルトを叩き落としちゃったんだから、もっと——」ジュペッタはそこで笑みを深めた。「何でそんなに怯えているの？」

言われて、ピカチュウは気づいた。

手が震えてる。足も震えてる。身体もだ。ついでに、尻尾も。ぶるぶると、いつそ情けない程に。

でも、だって——怖いのだ。

震えと同じように、無意識に身体は動いていた。

一歩、後ずさる。

ジュペッタは相変わらず笑っている。

もう一歩、後退。そしてもう一歩。

ジュペッタはまだ笑っている。

もう一歩の後退を迷っているところでピカチュウの横を何かが駆け抜けた。

——ヒノアラシだ。

すれ違う間際、一瞬目が合う。

怯えの強く浮かんだ瞳、今にも泣き出しそうだな、と思ったけどそれはたぶん自分もだ。

雄弁に瞳は語る。

逃げなきゃ、あいつらなんかやばいよ、ここにいたらきつとすごく危ない。逃げなきゃ、逃げなきゃ——何をしてるんだ！「逃げるんだ！」

気づいたら、走り出していた。

垢抜けない走り方で逃走したピカチュウの背中をジュペッタは見つめていた。ヒノアラシははじめから眼中にない。捕らえろと命じられたのは、ピカチュウだけなのだから。

ピカチュウのあの、なんという不格好な走り方。まるで生まれたての赤ん坊じゃないか。

うーん、とジユペッタは首を傾げた。その手の下、ボーマンダが地を這うような重低音で唸っている。

追いかけさせろ、と言ってるのだ。しかしジユペッタはまだ逡巡している。

あんな走り方、昨晚はしていなかった。雲間を走る雷を思わせる俊敏さでバルトの攻撃を悉く掻い潜り、あまつさえ自分の何倍も大きな体格の空を飛ぶ相手を叩き落とした、あのピカチュウとはとても、とても——そう考えるとあのピカチュウを追いかけていいのか、わからなくなる。

しかしもうしばらくの逡巡の末、ジユペッタは呟いた。「まあ、いいかあ」

ピカチュウを捕まえてこい、としか言われていないのだ。種族だけで、そこから先は特定はされていない。

もしこれであのピカチュウが違うピカチュウだったらおそらく、いや間違はなくブラッキーに何かを言われるだろうが、気にすることはない。バルトがいるのだから、気にすることは何もない。何も怖くない。

「バルト」

名を呼ぶだけでだいたい伝わる。

深紅のビロードのような肌触りの両翼が展開し、次の瞬間にはボーマンダは空に飛び出している。

いつの間にか森の端に突き当たっていた。

「こつち！」前を走るヒノアラシが催促する。「何してるんだよ！はやく！」

急かされながらピカチュウもヒノアラシが潜り込んだ聳え立つ断崖の岩壁の隙間に潜り込む。

幅がとてつもなく狭い、高さもない、けれど奥行きがあった。はやくはやく、と急かす声はその奥から来ている。

ひんやりとした感触の岩穴の内壁に手について身体を支えるようにしながらピカチュウは声の方に向かう。全力疾走のあとで、息がひどく荒かった。おまけに身体は記憶喪失からか、まるで他の者のように馴染まないものだったから、疲れは倍になる。

ほとんど引きずるようにしてギリギリ小柄なピカチュウが通れるくらいの幅の洞の奥に行くと——唐突に視界が開けた。

今までの狭さからは想像もつかないほど、といってもそこまで広いわけではないのだが——そこそこに広い円形の洞に出たのだ。

「へへ」

その洞の中心で、ヒノアラシが得意そうに笑っていた。

「ここ、ぼくんち。もう安全だよ」

「あなたの家……？」
「そ」

不躰だと思いつつも思わず見回してしまう。

たいして家具はない。部屋もこれ一つのようだ。不思議な発光する苔に覆われていて、岩山の中だという真昼のように明るい。

部屋は前述の通りたいした広さでもなかった。おまけに取り囲む内壁が何ともごつごつしていて寒々しい印象を受けそうなものだけど、けど何だか——「何かほっとする」ピカチュウは思わずその場に尻餅をついた。

そんな彼女にヒノアラシも頷いて同意を示し、部屋の傍らにあった坪から桃色の何かを取りだし、ピカチュウに放り投げた。

手で受け止め、目の前に持つてくると、それは桃色をした丸い――

――「木の実？」

ヒノアラシは頷いた。「モモンの実だよ。食べてみなよ」

「なんか甘い匂いがする」

「匂いだけじゃなくて、甘い味もするよ」

「へえ」言つて、ピカチュウはモモンの実をかじった。「本当だ、甘い」

甘味がようやく緊張のとけた身体中に染み渡る。少しずつかじつていたつもりだが、いつの間にか手に残っているのはへたと種だけだった。

美味しかったな、と思つてるとヒノアラシが二つ目を放り投げる。礼を言つて受けとり、かじりついた。ひどくお腹が空いてる気がしてきた。

自分も三つ目に口をつけながら、ヒノアラシが言った。

「甘いものを食べるといいんだってさ」

「うん？」

「だから……」ちよつと声の上擦っていた。「衝撃的なことがおきた後は」

「……」

「……」

居心地の悪い沈黙。咀嚼音も止むと、ヒノアラシは言う。

「甘いものは緊張を和らげるんだって。あと気持ちを落ち着かせる。だから、食べた方がいいんだ。特に……の後は」

「……お母さん？」

「そ、母さんが言ってた」

呟くように言うと、ヒノアラシはへたと種を部屋の隅にある箱に捨てた。ごみ箱なのだろう。ピカチュウもそれにならう。

そのさまを見ながらぼんやりとした様子で、ヒノアラシが呟いた。

「お母さん」何かを押し殺した声だった。「朝に町の方に行ったんだけど、もうそろそろ帰ってるはずなんだ」

思わずピカチュウはヒノアラシを見てしまう。

泣いてるわけではない、喚いてるわけでも。ただ、何だか——言葉にできない。けれどピカチュウは思わず言っていた。

「大丈夫だよ」

何の根拠もない言葉だと、反論されても可笑しくなかった。けれどヒノアラシは弱々しく笑って、頷いた。

大丈夫、大丈夫、大丈夫のはずだ——けれどどうしてもあの怪物と子供の姿が脳裏をちらついて、離れない。

土くれでつくられた『大丈夫』という言葉は少しつつけば、崩れそうだった。

「ねえ」

会ってから一番静かな声でヒノアラシがピカチュウに話しかけた。その声は何だか冷たいものを感じながら、ピカチュウはヒノアラシを見る。

「あいつら……さっきの、あの青いのと小さい子」声は微かに震えていた。「何話してたのかは怖くて聞いてなかったんだけど、なんか君に話しかけてたよね。知り合い、なの…？」
「っ、違う！」

そう叫んだ後に、しかし口ごもる。
知り合いじゃない、そのことを証明できない。あいつらと顔をあわせていたかもしれない昨夜の記憶すらないのだから。

「本当に？」とヒノアラシは問う。
ピカチュウは口ごもった。

けれど口は動いて意味のない言葉がその口からこぼれるが——それも、突然轟いた轟音に覆い隠された。

また、あの咆哮だ。

耳の奥で炸裂し、空気がびりびりと揺れ、世界が揺さぶられる。

同時に口をつぐんで思わずお互いの顔を見る。

咆哮に次いで今度は何か固いもの同士を打ち合わせたような音、何かが崩れ落ちる音。

相手の顔に走った恐怖を、どちらも見逃さなかった。

「なんてやつ……」ピカチュウは途方にくれたように首を振る。「岩壁を掘ってるんだ」

「そんな、まさか。そんなことしたら爪——かはわかんないけど、相手の方がイカれるよ！」

「言い切れる？」

妙な自信がピカチュウにはあった。

炎が背中から吹き出すこともあるのだ。岩壁を掘る？——できそうじゃないか、と自信満々に絶望的な気持ちで思う。

その予想の正しさを裏付けるようにヒノアラシは押し黙ったままだ。

実際、ピカチュウの予想は正しかった。

岩穴の外では相変わらずジュペッタをのせたボーマンダが“ドラゴンクロー”で彼女の予想通り岩壁を削っていた。

壁を削り、出た岩屑を掻き分け、より奥に進み、そこで息を潜めてるピカチュウとヒノアラシを引きずり出そうと再び爪を突き刺す。

確実に近づいてくるゴリゴリという掘削音、そして時おり響く例の咆哮。

モモンの実で宥めた胸の内が一息に再び荒れる。泣きたいような気持ちになりながら、それでもピカチュウは呆然自失とするヒノアラシに叫んだ。

「ここから逃げなきゃ！」今度は彼女が叫ぶ番だった。「しっかりして！」

「あ、え、でもどうやって!？」

掘削音。咆哮。止まらない。

——追いたてられてピカチュウの思考が摩擦で火花を出しそうなほどの速さで回り出す。

「穴！」掘削音を押し返そうとするかのようにピカチュウは声を張り上げる。「穴、掘れたよね！ ほら始めに会ったときの！」

はっとしたヒノアラシが慌てて入口から一番遠い壁に飛び付く。硬い壁だったが、掘れないことはない。ヒノアラシは穴を掘り始めた。

その隣でピカチュウも同じことを試みるものの、壁は固く、彼女を拒んだ。

「“穴を掘る”が使えなきゃだめだよ！」とヒノアラシに言われるが、意味がわからない。

何もできず、ただ掘削音が近づくのを待つことしかできない。部屋に響く音で気がどうにかなりそうだと、彼女は思った。

何かをしなければ、と思いつつも何もできない。けれど何かをしなければ。何かをしなければ。

そう、たとえばあの怪物の歩みを止めるとか。だけどどうやって？ ヒノアラシみたいに火でも出せたら、と思うが土台無理な話だ。だけれど、何かをしなければ、何かを、何かを——「どうすれば」

咆哮はもう、すぐそこだ。

「間に合わない！」ヒノアラシが叫ぶ。「どうしよう！ 間に合わないよ！ あとちょっとなのに！」

青い身体はピカチュウが通ってきたあの狭い通路からもう見えている。残すのは薄い岩一枚。それが崩れたら――その先を想像してこんな状況なのにも関わらずピカチュウの頭が真っ白に染まっていた。だめだ、すっかりしなきゃ、と思いながらも、追い詰められた心は勝手に走りだし、余分なものを一切振り払って、ただ一点に収束していくのだ。

――止めなければいけない。

そう強く思ったとき、パチ、と何かが弾けたような音が聞こえた気がした。

最後の岩盤が崩れ落ちる。

2 Fire & Fagot (後書き)

名前出すとこまでいかなかった、とか。そしてthe g d g d
のくせして変なところで切れる。

ふふ…次話一週間後の今日当たりに投稿できたら、いいな↑もはや
願望↑ただの馬鹿。いや、残念。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0274y/>

ポケモン不思議のダンジョン 意志を遂げる者

2011年12月3日06時02分発行